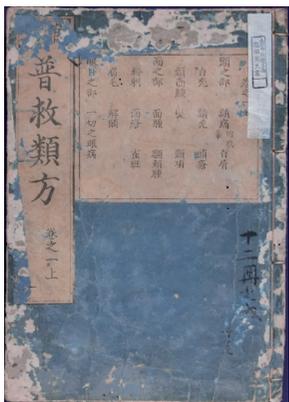
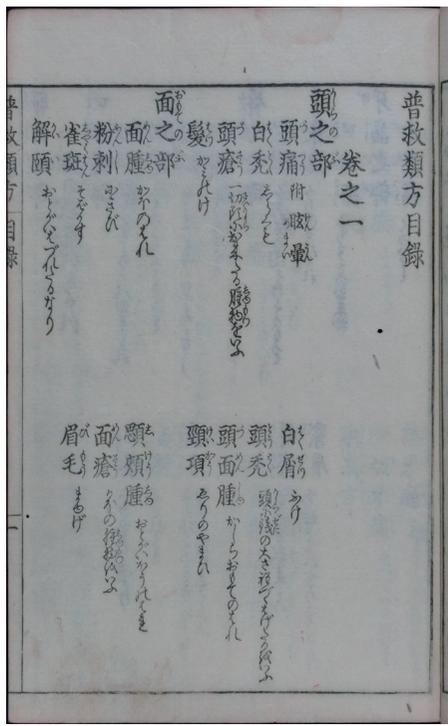
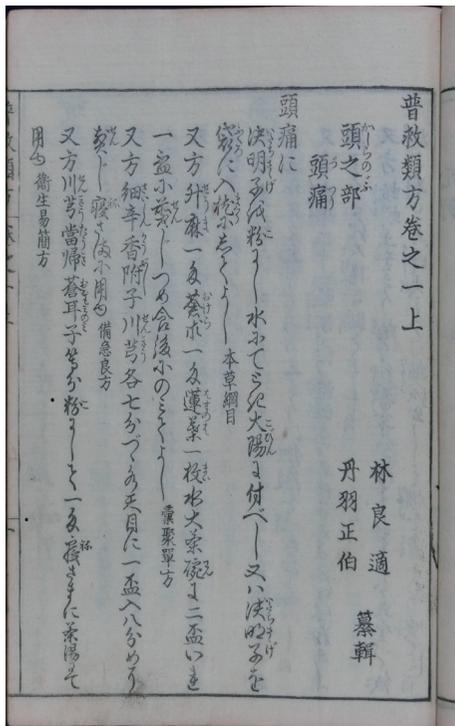


医薬知識の普及 (『普救類方』)



* 塩田家文書 和漢124~135
「官刻普救類方」

解説

8代将軍徳川吉宗は、1729（享保14）年、薬の知識の不足により多くの命が地方で失われていることを憂い、庶民向けの医学書である『普救類方』を幕府の医師に命じ編纂させました。つづいて1733（享保18）年、享保の飢饉後に疫病が流行したため、応急の薬の処方を記した『救民薬方』を印刷し全国の村々に配付しました。

写真は『普救類方』で、著者は林良適と丹羽正伯です。全12冊からなるこの本は、庶民も手に入れやすいように代銀9匁8分という格安の値段で販売されました。「頭之部」「面之部」「目之部」「鼻之部」など身体の部位毎に病状を列挙しています。その症状に対して、内外の医学書の中から、庶民にも入手可能な薬や簡単な治療法を選んで平易な和文で紹介しています。また最終巻では薬草の種類を図入りで解説しています。

例えば、頭痛の対処法には、

頭痛に、いたちささがを粉にして水にてとき、こびんに付べし。又ハ、いたちささがを袋に入枕にしてよし。 本草綱目

と、中国の本草書である『本草綱目』を引用し、マメ科の多年草である「イタチササゲ」を用いた処方を説明しています。その他、数種類の書物から別の処方も示しています。

